



2015年11月11日放送

頻用処方解説 牛車腎気丸①

九州大学病院 総合診療科 貝沼 茂三郎

1. 主な効能

牛車腎気丸は疲れやすく四肢が冷えやすく、尿量減少または多尿で時に口渴がある次の諸症：下肢痛、腰痛、しびれ、老人のかすみ目、かゆみ、排尿困難、頻尿、むくみに用いるとされています。また適応疾患としては腰痛、坐骨神経痛、腎炎、ネフローゼ症候群、糖尿病、高血圧、前立腺肥大症、白内障、脳卒中後遺症、膀胱炎、皮膚掻痒症、陰萎などに用いるとされています。

2. 出典・処方の由来

この処方是中国宗時代の巖用和によって1253年に編集された『済生方』水腫門に記載された処方ですが、その原典には、加味腎気丸の方剤名で「腎虚にて、腰重く、脚腫れ、小便利せざるを治す」とあり、腎虚で、腰が重く、下肢が腫れ、小便の出が悪いものを治すと記載されています。また牛車腎気丸は八味地黄丸に牛膝と車前子が加味されていますが、八味地黄丸を別名「腎気丸」ということから、牛膝、車前子から一文字ずつとってこの名がつけられました。

「腎」というのは、現代医学的には体に不要な老廃物や多く取り過ぎた物質を血液から濾過し、尿として体外に排泄する働きをします。それに対して『諸病源候論』（巢元方ら編纂、610年ごろ）には、「腎は腰脚を主る。腎経虚損すれば風冷之に乗ず。故に腰痛むなり。」とあり、漢方でいう腎は泌尿器としての腎のほかにもっと広く重要な概念を持っています。腎の役割は人間の生理機能を高めることと考えられています。また「腎は先天の気を主る。」といい、生まれながらの生命力が宿るところであり、その働きは年とともに弱くなると考

えられています。これを漢方医学的には「腎虚」と呼んでいます。つまり老化と腎虚には密接な関係があります。

3. 生薬構成の漢方的解説（薬能）

牛車腎気丸は八味地黄丸に牛膝と車前子が加味されています。八味地黄丸は8つの生薬から構成されています。各生薬の詳しい薬能についてはすでに解説がされていますので、簡単にまとめてみますと、新陳代謝の衰えを賦活させるブシ末、血行を整える牡丹皮、排尿の異常を治す茯苓、沢瀉、滋養強壯強精作用のある地黄、山薬、山茱萸、鎮静作用のある桂皮というものが一緒になり、強壯あるいは老化の防止、あるいは老化を引き戻すというような働きをするのではないかと考えられています。

牛膝はヒユ科の多年草ヒナタイノコズチの根で『神農本草経』には、「寒湿痿痺で四肢が拘攣し、膝痛して屈伸し得ぬもの、血気を逐い、傷熱、火爛、胎を墮ろすを主る。久しく服すれば身体を軽くし、老衰を防ぐ。」とあります。また『一本堂薬選』（香川修徳 1683-1755）には、「膝が痛んで屈伸できないもの、尿路の炎症性疾患、排尿時の熱感疼痛、血尿、陰茎の痛み、月経不順などの血液の鬱滞を治す。死産の後や妊娠中の婦人に用いることなかれ。」と記載されています。これらの牛膝の薬能をまとめると、牛膝は血液の鬱滞を取り除く作用、泌尿器系の化膿性疾患、腰痛、関節痛、腹痛などに用いられます。

車前子はオオバコ科オオバコの種子で、『神農本草経』には「気癰を主り、痛みを止め、水道、小便を利し、湿痺を除く。」と記載されています。つまり気が滞って小便が出にくい症状を治し、また痛みを止め、水分代謝をよくして小便を利して湿痺（体内の余分な水分が原因でおきた手足のしびれ）を除く作用を持つと考えられています。車前子の薬能としては、このように尿路の働きを活発にし、尿路の炎症を抑え、排尿困難や排尿障害を改善するのに加えて、止血作用や鎮咳、去痰作用などが認められています。

4. 古医書による記載

襲廷賢の『万病回春』（16世紀後半）には、薛己（明代）の『内科摘要』を引用する形で、加減金匱腎気丸として「脾腎虚し、腰重く、脚腫れ、小便利せず、或いは肚腹腫痛、四肢浮腫、あるいは喘急痰盛、已に蠱症（穀物につく虫を蠱といい、それが腹の中にいると信じられており、その虫による疾を蠱症と呼んだ）となるを治す。その効、神の如し、この症、多くは脾腎の虚弱による。次の宜しきを失し、元氣復た傷れて変症の者を治するは、この薬にあらざれば救うこと能わず。」とあります。

本邦においては、香月牛山（1656-1740）の『牛山方考』には、「脾胃の気虚し、腫重足腫小便利せず、腹肚脹満し、手足ともに浮腫し、或いは喘急痰盛なる者に八味丸に牛膝、車前子を加えて其の効神の如し、金匱腎気丸と名付く。」とあります。また淋症門には「久淋多くは腎虚なり、六味丸、八味丸を用いよ。加減金匱腎気丸も効あり。」と、久淋すなわち慢性尿路感染症様症状にもよいと記載されています。

津田玄仙（1737-1810）『療地経験筆記』は加減腎気丸として、「腎臓虚して留飲(胸焼けなどがして口内に胃液などが逆流した症状)の水腫を發するものを治する方なり。(略)この

方を用ゆるにはまず第一に腎の虚症をよくよく尋むべし、腎の虚症もみえざる水腫に用いては効なき方と知るべし。腎の虚症は足と腰とかよわく冷気を覚え且水腫の模様をみるに腰よりはれ強く陰丸も陰莖もはれ強く見ゆるものなり。是腎の虚症なり。此の方を用いてよし。」

百百漢陰(1774-1839)の『梧竹楼方函口訣』には、加味腎気円として記載され、脚気類では「八味丸の症にして腫の甚だしき者に用ゆ。下焦虚寒の症なり。」、水腫類では「腎虚で、水はけが悪く、小便不利し、腰より以下が腫満する者に用いる。転じて産後の浮腫に用いる。虚弱な女性の産前から浮腫傾向があつて産後日数を経過したのに、とかく腰以下に浮腫傾向が残り、年月を経ても治らず、はなはだしい者では腫満する者に用いてよい処方である。(略)ほかに毒壅瘀血等で実している候がなければ、たいていはこの処方でもよい者である。あるいは産後に気血が大いに虚衰し、腰以下に浮腫傾向があつて腰がぬけて立つことができぬ者、みな此の処方を用いてよい。そのほか、脚気の熱がなくなった後の虚腫になった者にもよい。虚労病末期の浮腫には、この処方などがまずは定石である。治らずに鼓脹となったものにも用いる。是も虚候で唇舌の血色を失い脈虚浮であるものなどにも用いるのである。つまりのところ鼓脹に類する位の時であれば効くのである。その他一切の虚腫に用いてよい。」とあります。

浅田宗伯(1815-1894)の『勿誤薬室方函口訣』では、牛車腎気丸料として「腎虚、腰重く、脚腫れ、小便不利を治す。」と『巖氏济生方』の記載が引用され、「八味地黄丸の症にして腰重く脚腫れ、或いは痿弱するものを治す。」とあります。また、痿症方の項には「脚気の痿症(運動麻痺)には济生腎気丸、大防风湯の類がよい。」とあります。

江戸以降の医家の記載は、基本的には『巖氏济生方』や『万病回春』あるいは『内科摘要』の条文に準じた内容となっており、牛車腎気丸の使用目標は「腎虚、下半身の浮腫、排尿異常」で概ね共通しています。